イギリス旅行記　1975年7月—9月

T. グレイをめぐる断片 (1)

山本博信*

Journal of a Literary & Historical Pilgrimage to the British Isles July-Sepember, 1975

Fragmentary Notes on Some Places Associated with Thomas Gray (1)

Hironobu YAMAMOTO

はじめに

昨年夏，はからずも2ケ月のイギリス旅行をする機会を得た．この旅行は，"A Literary and Historical Pilgrimage to the British Isles" と銘打っの，P. ミルワード教授（上智大）の企画，引率による団体旅行であった．参加者は，およそ30名で，イギリス，アイルランド（北を除く）全土を巡るカンタベリイならぬ英国巡礼であった．この旅行で，同行の士に迷惑にならぬ範囲内で，可能な限り団体の枠をはらって行動した．しかし，それがむしろあだになった場合もあったかもしれない。

本稿ではその中から，T. グレイ（1716—1771）が主として関係する場所を数ケ所選んで，その見聞を断片的にまとめた．

ついでながら，今度の旅で特に感じたことを二つ記しておけば，その一つはイギリス社会の冷たさと暖かさを張り合わせたような不思議さだった．ちようど風呂をかきまぜぬまま沸かしたようなもので，上の方は手もつけられないほど熱くても，そこを我慢して入り込んでしまえば，下の方は存外冷たいという感じである。一体冷たいのか熱いのかわからないのである．イギリス人というのは一体冷淡なのか，それとも親切なのかわからない．正規の手順でゆくと剣もほろろにあしらわれるが，それを無視して中に飛び込んで行くと，そこでは親切が（可能な限りの親切が）待っているのが普通だったのに気づくのである．イギリスに2ケ月いて住みよいような，住みにくいような感じを抱いたのは，ただ旅行者という身分であったせいばかりではないような気がする．F. ベーコンは，その "Essay" の「旅について」の中で，その土地の立派な人への推薦状（recommendation to some person of quality）をもらうことをすすめている．これはベーコンが大陸を念頭においての言であるが，それは今日イギリスを旅行しようとする者にとっても，そのまま通用する，至極適切な助言であろう．そのことを今度の旅行で，特にオックスフォード，ケンブリッジでの体験を通じて感じた．

たとえばコレッヂを訪ねた場合だ．コレッヂの正門入口 gateway には必らず porter's lodge がある．そこには一人か二人の porter といわれる受付かかり員がいる．もちろんオックスフォードの Pembroke College のようにたまに愛想よく，親切な porter を見ることもあるが，この porter の不愛想ぶり，横柄さにはあまり異論はあるまい．ケンブリッヂの同名の College をグレイのものを少し見るつもりで訪ねた時などは，その最たるものだった．porter's lodge へ行き，身分を名のり，グレイの部屋が見たいのだがともちかけると，何やら書き物をしていた太っちょの porter は顔も上げず，いいかげんな合槌をしていたが，ペンを置くなり，「休暇中だ。絶対入ってはいかん」と言った．見ると，蝶ネクタイをしている．侮蔑的な眼でこちらを見ている．日本では，あるいは，こんなことは当り前のこととして受け入れられるかもしれない，が不思議にもオックスフォードやケンブリッヂは，普通その一部を一般に開放しているのである．それなのにこの応対ぶりは何だ．はるばるここまで来て，何でいまさらおめおめ引き下がれよ

* 宇部工業高等専門学校英語教室

うか．グレイの部屋は外からでも見えよう，外からでも見たいと言うと，その白ブタのような porter は例によって顔も上げず，ペンを手にしたまま，向いの hall（食堂）のポーチに立って右を見ればあると言った．何をこのイギリス野郎，無礼な！と思いながらも，この期に及んでどうする訳にもいかない．最後に「絶対に建物の中には入ってはいかん」と念を押して言った．こちらにはグレイという目当てあればこそ訪ねたのであったが，それなくしては誰がこんな所へ来るものかと幾度心の中で叫んだかしれない．そしてこの男のためにケンブリッヂの印象をすっかり悪くしてしまった．（このコレッヂにはほかにも数名の porter がいるが，彼ほどに不親切なわけではないことをその名誉のために付け加えておきたい．）それでもその男のポーチという hall の入り口まで行ってみた．右を見れば見えると言ったって，右も様々．おまけにこの hall は二つの court（オックスフォードでは quad という，四面建物に囲まれた中庭）を仕切っていて，右といっても第一の court に面する建物と中の court に面する建物とがある．そこで少時，平静さの回復するのを待って，中庭を歩いてみた．その結果，中の court の南面に面する建物であることがわかった．建物には二ケ所の昇降口があり，その鴨居の所に普通 A とか B とかの文字や数字が書いてある．下の横の方にはその階段（staircase）にある部屋の居住者名や部屋の番号が表示してある．その中に「グレイの部屋」と言うのを見つけたのだ．"The Thomas Gray Room" と書いてある部屋は二階で，ホールの隣りであった．ドアはロックしてあった．とにかくグレイの部屋がわかるにはわかった．それに勇気を得て，今度はその南にある図書館へ入って行った．そこのグレイの稿本を見ようというのだ．階段を上ってドアを二つ開けて入った．奥から中年の女性が出て来た．例によって自らを名のり，意向を伝えると，その司書らしい女性は自分には professor の permission がないと見せる権限がないと言って，professor の name & address を図書カードに書いてくれた．後日この professor からの葉書を手に訪ねた時はグレイの部屋までも案内してくれた．多少大げさになるかも知れないが，とにかくそこの立派な人への推薦状は物を言う．別に推薦状である必要はない，そこの立派な人の permission でよい．特にオックスフォード，ケンブリッヂで何か調べるとか，見るとかとなると，その成否の鍵を握ることもありうるといえよう．イギリスには四角四面に振りかぶって考えると，ちょっと外者には手も足も出せぬところがある．大英博物館の Reading Room 使用申し込みに「申し込み者を個人的に知り，リィーディングルームを使用するにふさわしい人物であることを証明する，しかるべき地位にある人物の推薦」が少くとも正規には条件づけられているが如きもそれだ．しかしよく知ると必ずしも額面通りではないのである．これがイギリスの融通性であり，場合によっては信用の社会ということを意味しているのかも知れない．あるいはミドル・クラス* の国民性というものなのかも知れない．

いま一つは，一期一会とでも言おうか，旅に出て"後でまた"とか"また後でゆっくり"と言った気持は禁物だということだ．別に自分の見聞の不備をこれによっておおうつもりはないが，特に Stoke Poges の教会やロンドンではついこの"あとで"の気持が観察を不注意にしたり，その機会を得ずじまいにしたりしてしまった．"あとで"というのには，その時は可能性としては充分に実現性に富み，真実性を持っているのであるが，結局はその"あとで"は実現しないのが旅の常だ．これは旅先でものを買う場合にも言える．この不発の"あとで"を嘆く筆者を「それでまた訪ねる理由ができたではないか」と言って慰めて下さった人もいたが，一期一会の気持は忘れられまい．

1. Oxford

緑を背景に古い大学と教会堂の tower や spire や pinnacle の群が，大空に競うようにしてそびえ立つ様は，壮観という他ない．はじめて見る者の目には，これが大学とは仲々信じがたい．城郭の町ではないかと疑われる．この学都 Oxford は T．グレイに特に関係するところではない．筆者の知り得たところでは，死の一年前に旅先きから一度立寄ったばかりだ．それなのに Oxford をまず取り上げるのは，当地が筆者にとってイギリス最初の滞在地であり，ここを根城にグレイゆかりの地へ一度ならずくり出したからと云うだけではない．このオックスフォードにはグレイの刎頸の友 Richard West の母校があり，互に知ってはいたが，言葉をかわしたことのない当時の文壇の大御所 Dr. Samuel Johnson が在学したところでもあるからだ．グレイとまるきり無縁とも云えないのである．

* E. M. Forster は「イギリス人の性格」の中でイギリス人を 'a nation of middle classes' と規定している．

現在，34のcollege（うち女子学寮5）があり，university を組織している．総長（Chancellor といい，一種の名誉職）は元主相の M.H. Macmillan である．学生総数10,700（うち学部生7,700，女子学生約1,500）*とか．市内中央部を東西，南北に目抜き通りが走る．この目抜き通りの交差点が旧市の中心点で，その北西の角に Carfax Tower という灰色がかった古い石造の四角い塔が立っている．ここは昔，St. Martin's Church という Oxford の町教会（parish church）のあったところで，シェークスピアが近くの tavern，「王冠亭」の息子の名親（sponsor）の役をしたといういわくつきの教会でもあった．Carfax Tower は元来この教会の tower であったが，教会は前世紀末に道路工事のために取りこわされてしまった．塔だけは14c以来残り続けて，この町を訪れる人の目を引いてきたのである．事実，Carfax は市内観光の起点であり，シーズンともなれば，この界隈は観光客でごったがえす．塔の下は町を上から眺望せんと押しかける人で埋まる．塔から北へのびる繁華街 Cornmarket Street はその北端の Martyrs Memorial 付近まで，紙くずとほぐが散乱する．話しと違うと思っていると，それが翌朝にはきれいに掃除されているのには二度驚く．この Carfax Tower には古典的な時計がついていて，その下に大小二つのつり鐘が横に並んでぶらさがっている．その両脇に奇妙な人形が一体づつの鐘のつなを手にして立っている．山口の亀山の教会ではないが，これが15分おきに鐘を打つ仕掛けになっているが，そのコミックな兵士の姿は人の注意を引く．この Carfax の四辻から東へのびる古くて美しい大通りを High Street といい，テムズ川の支流，Charwell 川にかかる Magdalen Bridge** におよぶ．地元では通常，'High'「ハイ」と呼ぶこのゆるやかにカーブした下り勾配の大通りは，両側の大学，教会の建築美と共に18c の街並みをほとんどそのまま完全に残していると言われる．Oxford の自慢の一つである．この通りを，遠くはエラスムスやコレットやモアーが New Learning の意気にもえ，ガウンを翻して濶歩したかもしれない．また18c に入ってからは，若き日の Dr. Johnson やグレイの親友 R. West がこの同じ通りをうら悲しい思いを胸に，冷たい風に吹かれて行く姿が見られたかも知れない．グレイもまた，1770年の8月に St. Mary's Church の buttress の多い tower やQueen's College の珍しい 'Cupola' を見上げながら，興味深げに歩く姿が見られたに違いない．collge の大半はこの1.000m 足らずの 'High' の両側に集中しているが，R. West や Dr. Johnson の college は Carfax の前の四辻を南下する St. Aldate's Street にある．

Carfax から St. Aldate's St. を南へ少し下って行くと左手に Town Hall がある．その壁には 'This street known till 1300 as Great Jewry, contained many houses of the Jews, including the Synagogue, which lay to the north of Tom Tower.' とあり，この通りがユダヤ人街であったことがわかる．この Town Hall の斜め向いに中央郵便局があり，そのすぐ近くの家の窓ガラスに，オックスフォード到着の日，バスから 'House to Let' のはり紙を見た時はうれしかった．さらに少し下ると，Carfax からおよそ200m位の所の左側に R. ウエストの母校 Christ Church があり，その向いに，道路をはさんで Dr. Johnson が在学した Pembroke College が道路から奥へ長くつらなっている．

ところで，グレイがこの Oxford を訪ねたのは53才の1770年夏であった．これは英国西南部の山国を巡る旅行をし，その帰途 Oxford に立ち寄り，二日間逗留したものであった．同じ友人仲間の Horace Walpole は West がまだ在学中に一度 Oxford を訪ねているらしいが，グレイがこんなに遅く，それも West のいない Oxford を訪ねたのは不思議な気がする．あるいは亡き昔日の友人をなつかしむ気持でも起ったのであろうか．この旅は元来，すでに professorであったグレイがその7月の卒業式に出るのが嫌で思いたった旅であった．グレイはその前月の6月24日に若い友人 Norton Nicholls に手紙をやってこの旅行の計画を告げ，同行を求めている．そして落ち合う日まで決めて，7月1日か2日にしようと提案している．その理由に，卒業式に出たくないから（for I don't like to be here at the Commencement）と言っている．当時の卒業式は7月の第一火曜に決っていて，この年は7月3日に当たるのであった．結局グレイは7月2日に発ち，この旅を決行した．この漫遊 'ramble' は若い Nicholls を伴っての芭蕉と曽良の「奥の細道」ならぬ二人旅であった．グレイはロンドン経由で帰ってくるのだが，ロンドンには8月3日に着き，そこで少時旅装をといて，8月17日ようやく Cambridge に落ち着いている．グレイは旅から帰るとすぐ友人の Thomas Wharton* にあてた手紙**を書き，

* Blue Guide（1972版）による．

** すぐそばのモードレン・コレッヂ（最も貴族的大学の1つ）に因んでの稱．

* cf. p. 13（左）脚注*

** 1770年8月24日付の手紙．

Worcestershire, Gloucestershire, Monmouthshire, Herefordshire, Shropshire の計五つの，英国でもっとも美しい国を巡る6週間にわたる漫遊をして最近帰った，と報じている．旅の中心は Wye 川で Ross から Chepstow まで40マイルを舟で下り，川の両岸は筆舌に尽しがたい驚異の連続であった．Chepstow Castle, Ludlow を見て，最後に Oxford に達したことを伝えて次のように記している："〔Oxford〕where I past two days in return with great satisfaction" なお Chepstow 城および Ludlow 城はいずれもノルマンの古城址で，Chepstow はワイ川河畔にあって，筆者が訪ねた時は眼下に流れる水はひどく濁っていた．ラドロウの城址はミルトンの 'Comus' の初演の場として知られている．また今一人の友人W. Mason には，これより少し遅れて便りをし，9月初め**頃手紙を出し，その中で同じ旅の報告をしている．この旅の圧巻はワイ川筋で，Ross から Chepstow へ到るあたりは Tintern Abbey などの名をあげて，尽きない喜び 'ever-new delight' にあふれていると言い，Oxford ではどんなに楽しく二日を過ごしたかしれないと言っている：'nor how I past two days at Oxford very agreebly. the Weather was very hot, & generally serene.' '天気は暑かった' と言っているから，この1770年の夏も暑かったのであろう．筆者の訪ねた1975年の夏も異常に暑い夏であった．それでも夕方になると手袋をはめたり，マフラーをかけたり，ジャンパーを着て自転車に乗っている姿を，Oxford の Banbury Road や Norham Garden で見かけたのには驚いた．

ともかくグレイはこれ以上のことは Oxford については言っていないのである．楽しいと言ったって，何を見，どこを歩き，何をしたのか知る由もない．Oxford でのグレイをこれ以上明らかにできるとすれば，Nicholls を洗う外ないであろう．ただグレイの趣味から考えて，その建築美を賞でて歩き，亡友 Westの college を（これは建築美の面からも）訪ねたであろうことは想像に難くない．二日もいて，それ以外にグレイが何をしたであろうか．あるいは「英国詩史」の Thomos Warton** にでも会ったのであろうか．

Christ Church 'the House' の異名で知られるオックスフォード最大の，そしてまた最も貴族的なこの college はやや複雑な歴史と機構をもっている．それは St. Aldate's 通りに面するこの大学の正門 'Tom Tower' にも象徴されている．創立は壮大な「新学問」の場として，1525年，時の Cardinal, Wolsey が修道院跡地に開いた 'Cardinal College' である．Wolsey 失脚のためこれが完成を見ぬまま Henry Ⅷ王に引継がれ，1532年 'King Henry Ⅷ's College と称したが，1546年これを廃し Christ Church を創立した．これは新たに Oxford に主教職（bishopric）が設けられ，はじめ Osney Abbey におかれていたものを college に糾合したものであった．そのため，Christ Church の chapel は一学寮の chapel であると同時に，Oxford主教管区のcathedral でもある．それ故，Christ Church の学寮長は cathedral の長 bishopric（主教職）をも併任する．学寮長，つまり学長は，Cambridge では通例 'master' であるが，Oxford では 'master', 'warden', 'president*', 'principal', 'provost', 'rector と college により様々によばれるが，Christ Church だけは 'Dean' と呼ばれるのも，そのためである．この college の正門は，左右に八角形の塔を配し，その上に 'ogee' をのせ，その中央，gateway の真上に，Wolsey の像を配している．このウルジー像は1719年の作というから，West が入学する10数年前のことである．この Wolsey Tower の上に，角に大きな buttress を配した同じ八角形の塔を1681年に Christopher Wren がつぎたし，今日見る壮大な Gothic 様式のものとした．このバトレスはケンブリッヂの King's College Chapel のそれを思わす大きなものだ．Wrenはさらに，Osney Abbey から大鐘を持出しこの塔の中につるした．この鐘を 'Big Tom' といい，塔を 'Tom Tower' という．この Tom Tower から毎晩9時5分になると101の鐘が鳴らされるというが，その鐘を一度も耳にしなかった．101の音はその昔の学生の数であったという．鐘は閉門の合図である．この gateway を入ると，これまた広大な quad**（中庭）がある．この Wolsey の設計になる中庭は Oxford 最大のもので，その向うに chapel がある．さすがに Cathedral だけあって，内部の重厚感は他をよせつけない．

ウエストはこの大学へやってきて，毎日のようにTom Tower の下をくぐり，毎夜 Big Tom をきいたであろう．彼はここのどの部屋かでグレイからの便りを待ちわびていたに違いないのだ．入学して半年ばかり経った

* 受取人の Mason は9月7日と書込んでいる．
** 友人 Thowas Wharton とは別人，もともとグレイは英詩史の計画をもっていたが，T. Warton に同じ計画のあることを知り断念．人を介してグレイに助言を求めている．

* Cambridge では vice master のことで master が任名する．
** quadrangle の略称，ケンブリッヂでは court という．

1735年の11月14日付けの手紙の中でこういっている：

「君は実にひどい．ぼくがオックスフォードへきてから，まだたったの一度しか手紙をくれていません。その手紙もあんまり心なごむ手紙だったので，こんなにも便りがないと，いよいよそのさびしさを覚えます．君の顔が見られないのなら，せめて君の書いた文字なりと見れればと思います．君の声がきかれないのなら，せめて君から便りでもあればと思います。・・・」

さらに，追伸を付し便りを催促している："P. S. I desire you will send me soon, and truly and positively, a history of your own time."（追伸，すぐに，そして必ず是非とも君の生活時間のことをお知らせ頂きたい．）そのウエストは，'教師達はやれドクターだやれ教授だと威張り，Homer も Virgil も知らず酒と詭弁が巾をきかした'当時の Oxford の学風の荒廃をきらっていた．グレイもまた Cambridge で同じ悩みをいだいていたが，そのグレイに対してウエストはこのクライスト・チャーチから文学だけはやれと励ましている．ウエストは早くから文学を解し，その文才はグレイを凌ぐものがあるということでは，大かたの評者の一致するところだ．その夭折が惜しまれる．彼が Oxford を引くことに決めたと思われる1738年の2月21日付けの手紙の中で，グレイに対してこういっている：「ぼくが大学を去るのをよろんでくれ給え，そして君もできるだけ早く去り給え．ぼくはじきにテンプルに落着く．」ウエストは結局，学位を取らず1738年4月に引き上げ，ロンドンの Inner Temple 法学院へ移った．当時 Oxford, Cambridge でも法学は教えたが，ローマ法と教会法であった．ところがイギリスの実際の裁判は国内法たるコモン・ローに拠ったのであり，これはテンプルを含めロンドンにあった四校の法学院で教えた*．valister（法廷弁護士）として法廷に立てるのは，この法学院の卒業生に限られるという事情が，このウエストのテンプル行きにはあったものと思われる．こうして，グレイもまたウエストの後を追うようにして，その年の9月には Cambridge をやめて，ロンドンへ帰るのである．

このコレッヂには南側に大きな草原があって，Christ Church Meadow という．ところどころに大樹の植込みがあり，その一角には牛も放たれている．ここで夜，野外劇をやることがある．7月終りのある夜，シェークスピアの「マクベス」を見た．入場料は40P*にプログラムが10Pだった．8時30分頃から始まり11時頃終った**．草原の中央に舞台を組み，その舞台うらにスクリーンを立て，その背後にテントを張っている．役者の控室で，いわゆる'舞台裏'である．舞台の前面三方には10段くらいある階段式のスタンドを築き，四隅にステップが設えてある．ここから観客は昇降する．これに楽団が舞台下につく．スタンド最上段に取りつけられた照明装置が闇の中に舞台を煌煌と照らしだす．小雨をついての超満員の芝居は期待したほどではなかった．ストラットフォードの「ヘンリー四世」に比べれば問題にならなかった．特に主役のマクベスがまずい．芝居は役者が大根では駄目だとつくづく思った．また，この meadow は Dr. Johnson が授業をさぼって氷滑りをして遊んだことでも知られる．一度，この meadow からコレッヂの南口へ入り，そこの便所を使ってみたことがある．分厚い板のドアーを引きあけると，そこにあるオークとおぼしき便器の台座が印象的であった．その重厚な材質とその黒光りのする光沢から，相当の年代ものであることが分かる．そばに麻縄のようなものがぶら下がり，引くとガチャンと金属の動く音がして水が流れ出る仕掛けになっていた．

ここの有名な卒業生には，Lock, Luskin, Sidney にまじって，Auden や Dodgson（コレッヂの数学教師，「不思議な国のアリス」の作者）がいる．Tom Tower の前の通りの向う側には "Alice's Shop" というみやげ店があった．ロンドンの 'Old Curiosity Shop' ほどではないにしても，イギリスもこの手の商売が目立つようでは，ナポレオンとは違った意味で 'a nation of shopkeepers'*** になってしまっているのかも知れない．

Pembroke College　グレイと Dr. Johnson は互に顔は知っていたが，話をしたことはなかったという．しかし，各々の交際の中で間接的には互によく知っていた

* 「ロンドン庶民生活史」（ミッチェル，リーズ著，松村赳訳），229頁参照．

* 普通，「ピー」と発音される．もちろん pence の略語．1pは6，7円に相当した．

** ちなみに，OXFORD UNIVERSITY POCKET DIARY，1974—1975を見ると，75年7月27日（日）のオックスフォードにおける日没は21時03分．事実夜9時頃まだ薄あかるかったのを覚えている．

*** ナポレオンは驚異的経済成長をとげていた19cのイギリスを軽蔑的にこう呼んだ．当世流に言えば「エコノミック・アニマル」ということか．

ものと思われる．例えば，グレイの多くの詩を手がけたドヅレイ兄弟* はジョンソンの「英語辞典」とも関係しているし，ジョンソンの Literary Club 関係の Clarke, Temple などはグレイと直接に交際があった．また，名優ギャリックは *Elegy*に感激してわざわざ Stoke Poges にグレイを訪ねたという．よく知られた話だが，晩年グレイが子供のように可愛がったスイスの青年 Bonstetten を連れてロンドン案内をしていた時，Strand あたりでジョンソンが通っているのを目撃して，「おいおい，ボンステッテン君，大熊だ．ほら，あそこをウルサ・マイヨールが行く！」とグレイがいったとか．また，1748年にグレイはウォールポウルへあてた手紙でジョンソンを暗に批難して，「テンプル辺りのさるコーヒー店では，世評を待って批評をする。」といっている．当時ジョンソンは「英語辞典」の刊行の企画を発表したばかり，グレイは *Eton Ode* を出版したばかりで，ジョンソンに対し対抗心をもやしていたのではあるまいか．後にジョンソンは「グレイ伝」を書くなど，二人の間の仲には，言わず語らずの中にもあるスタイルができ上っていたといえる．グレイはジョンソンの親分肌がおおまかで，横柄に見えたであろうし，ジョンソンにはグレイの引込み思案で言葉数の少ないのが何とも気づまりでやっかいな代ものに見えたであろう．

このジョンソンが1728年（19才）の秋，Gilbert Walmesly のすすめで，リッチフィールドから Pembroke College に入った．このコレッヂの創立は1624年．St. Aldate's Streest をはさんで Christ Church の向いにあり，St. Aldate 通りから奥の方へ長く，Pembroke Street に沿って伸びている．この Pembroke 通りと St. Aldate 通りの交差する角に，つまり北東の一角に St. Aldate's Church がまるでコレッヂをかぎ取るように立っている．そのため，大通りからはコレッヂの建物は L 字形に見える．正門である gateway はこの L 字の内側の角にあり，その建物づたいに東側の通り St. Aldate 通りからでも，北側の Pembroke 通りからでも達することができる．北側の Pembroke 通りから入る小路に立つと，真正面に何の飾りも変哲もない四層の四角な塔が見える．これが gatehouse で，位置的には大通りをはずれていて，何か裏門の感じがするけれども，少なくとも現在は Pembroke College の正門である．この四層の gatehouse は一層が gateway で，そのうす黄味をおびた石造りの建物をポッカリとくりぬいたアーチ型の空間の向うにきれいに刈り込まれた中庭の緑が見える．二階から上が部屋になっている．三階が Dr. Johnson の部屋だと知るものの目には，この北向きの殺風景な gatehouse の全容はある感慨を引き起す．そこには三枚の細長い小さな窓が並んでいて，その北向きの窓から若きジョンソンの顔がのぞいたこともあろう．また，下の gateway を毎日のように出入りしたことでもあろう．後年，彼は3年はいただろうといっているが，実際はこの学寮にいたのは1年2ケ月だといわれる．後日ここの Common Room を見せてくれた librarian は1年足らずしかいなかったといった．正式には1731年12月に退学したことになっているから，別にジョンソンが嘘をついている訳でもない．

四方を建物で囲い，中の空地に芝生を配して庭とする．その囲いの建物のどこか一箇所に出入口をつけ，その上には普通，やぐらを組み装飾を施す．これがオックスフォード，ケンブリッヂのコレッヂの基本的構造である．この出入口が gateway であり正門である．それを含めて，その上のやぐらが gatehouse である．そして‘そのゲイトウェイの横には porter's lodge なる受付守衛所とでもいった小部屋が必ずあるのは，すでに述べた通りだ．その中に porter という通例，余り親切でない無愛想な受付・雑務係りのような男がいるものだ．Pembroke College のgateway は右手に porter's lodge があり，左手の壁は掲示場として用いられていた．ここには学生への通知，ポスターなどが掲示されていた．郵便物の受取りや学寮人への連絡もここでやる．このあたりによくロープをかけた大きなトランクがころがしてあるのを見かけた．学生または教師の帰省用の荷物か，帰省先か旅先から送り返されたものなのであろう．

この porter's lodge でジョンソンの部屋を見たい旨を告げると，中の60がらみのやや赤ら顔で大柄な目がねの男が，少し大儀そうであったが，案内してやるといってくれた．この porter は，ケンブリッヂの同名のコレッヂ，ペンブルックの例の白ブタ野郎とはちがって，非常に親切であった．この porter's lodge の入口から左に一歩入るや急勾配のせまい階段が螺旋状に昇っていた．階段も手摺もすべて重厚な木製で踏み段は長年の昇降のため，すりへりその中央部あたりは凹んでいた．ま

* Robert Dodsley ; James Dodsley. ‘R & J. Dodoley’ の名で Pall Mall に書店及び出版所を開いていたが，1759年兄 Robert 引退以後は James が一人で経営に当った．1768年には「グレイ全詩集」をここから出している．

た手摺は角という角が丸みをおび黒びかりしていた．古色蒼然という感じだ．時の重みを感じさせる．時折，階段がきしむ．ところどころランプの据え台だったと思われる鉄わくが柱に取りつけられたまま残っている．先導する porter は中風かリュウマチか，片足を引摺るようにして，喘ぎあえぎ昇って行く．この建物はジョンソンの頃から変ってはいないのかと問うと，苦しそうに，「変っていない」という．途中で二三度休む．息切れがするらしい．ジョンソンもまた，この階段を昇降したにちがいない，こうして息をはずませ，もどかしい気持ちで．いやそれとも自尊心にあふれた彼は泰然として，わざと悠悠と昇ったかも知れない．あるいはその自尊心の強さの余り，このどう見ても冷飯としか思えない居室に屈辱的不満を毎日おさえながら昇降したかも知れない．さればこそ憂鬱病の兆候が高じたのであり，その苦しみが気違いのように乱暴にさせ，人をして 'gay and frolicsome fellow'（愉快でふざけまわる男）と言わしめたのであろう．螺施状のこの階段を幾度かまわり2回転，つまり720度廻ったと思える頃，白くペンキの塗られたドアーの前の踊り場に立っていた．このドアーの前なのだ，誰かがジョンソンのボロ靴を見かねて，新調の靴をおいて行ったというのは．ジョンソンは激怒して，すぐ右の窓から下の quad にその靴を放り捨てたという話がある．porter はもってきた key で白ペンキのそのドアをあけようとしたが開かない．key がちがうといっておりて行った．びっこをひきひき面倒くさげに降りて行った．気の毒，この上ないことだ．やがて再び上ってきた．ここは今も使っているのかと問うと，使っている，今は休暇中で空いているのだという．それがすぐには信じられない程，部屋の中はがらんとしていた．応接セットのような小テーブルと椅子が2，3脚雑然とおかれてあった．北側に外から細長く見えた窓があり，半分引いたカーテンがかかっていた．porter は出がけに，ロックしてきてくれといって，keyを筆者に手渡し，そのまま降りて行った．いい気なものだといえばいえる．だが見も知らぬ他国者に，それも初めて会った人間に部屋の key をゆだねるのであるから，イギリス人の信頼感というのも徹底したものだ．このペンブルックのポーター氏（後でその名は Harry Priceと知った）のおかげで筆者のオックスフォードに対する印象は大いによくなった．これは余談だが，Cambridge では porter の一人が不親切きわまりなく，そこの印象を非常にわるくしたのとは対照的であった．

独りになってよく部屋中を見ると，左側の壁に接して木製のベッドがあった．その上に，洗濯された寝具のシーツ，カバー類が枕のようにおりたたんで，一つ一つビニール袋に入れたのが3つ4つおいてあった．これをみて初めて，今も学生が使っているといった porter の言葉が信じられた．ベッドは明らかに現代のもので，時代ものではなかった．それにしても一切個人の持ちものらしいものがないのはどうしたことか．Exeter, York, Edinburgh の大学に泊った時もそうだった．ベッドと反対側の壁に fireplace があり，たき口の鉄枠はいかにも時代を経た代物のようであった．中には電気ストーブが入っていた．昨今はロンドンに限らず石炭はやめ，オックスフォードのような学都でも暖房は電気や石油にたよるものと思われる．マントルピースもさすがにきれいで，火を焚いた跡は少しもなかった．そばにcaneのほぐ籠が一つあった．その右に机と椅子があり，机上には布のかさがついた白熱電燈のスタンド．となりに小さな3，4段の書棚があり，その近くに横長の開戸と引出の組合わさった収納ダンスのようなものがあった．これらはいずれも，現代のものであった．床にはじゅうたんが敷いてあった．窓枠は白ペンキが塗られ，壁には白地に水色と淡黄の色模様の壁紙がはりめぐらされていて，外部とは全く均り合いのとれないものであった．とても250年前，ここに Dr. Johnson が住んだとは思えないものであった．天井から電燈がぶらさがり，それにも植木鉢を逆さにしたような布張りのかさがかけてあった．日本なら螢光燈であろうが，イギリスではどういう訳か，今なお白熱電燈を多く用いている．節電の見地からいっても螢光燈に切り換えればよさそうであるが，その切り換えの金が今のイギリスやオックスフォードにはないのかも知れない．北の窓に近づくと窓越しに教会が見える．視線を下へやれば gateway の正面をまっすぐ北へ教会西側に沿ってペンブルック通りへ出る小路が見えた．ジョンソンも幾度かこの窓越しに，或るは望郷の念にかられ，或るは苛立ちを覚えながら，あるいはにがにしい思いを胸に秘めて，教会や小路をながめたことであろう——この窓辺に立つとそういう思いがするのであった．

この部屋には南側にもう一つ小部屋が付属していて，書棚のすぐそばにそのドアがあった．ここは水道が付いていて，今は洗面や脱衣に使われている風だった．床に絨毯が敷いてあることは変らないが，壁は全部白くペンキが塗ってあった．南面の上方に明り取りのような窓があり，足下の方の壁を給水管や温水管や電線が這っていた．そのすぐ右に例によって水と湯の出る basin がついていた．古くはこの部屋は寝室に使われていたものと

思われるが，今は洗面場，更衣室，納戸といった感じだった．この部屋で古いタンスと古い木製の椅子を一脚見かけた．タンスは前面がふくらんで孤を画き，半月のような変った形が印象的だった．

それにしても一人二部屋とはうらやましい．二人一部屋とは大違いだ．porter から渡された key でドアをロックして下へおりた．ロックしたことを告げ key を返し，身分を名乗り謝意を述べた．心付に10p と日本の穴のあいた五円玉を一つ与えた．別れしなに lodge の入口でポーターに写真を一枚とらせてもらった．茶の背広に紺のよれよれのズボン，えんじのネクタイ，すりへった大きな皮の短靴が彼の出立ちであった．写真を送るからといってアドレスを書いてもらった時，'I'm the head porter.' といって自己紹介した．交替の時間だったのか，もう一人 porter らしい男がきていた．後日，T先生夫妻をこのジョンソンの部屋に案内した時には，ヘッド・ポーターの Price 氏は筆者に lodge の入口でkey を渡してくれた．

別の折りに（筆者はこの大きくもなく華美でもなく，従って訪問客の少ないペンブルックが気に入り，オックスフォード滞在中よく立寄っていた），この Mr. Price にここの Senior Common Room にジョンソンの遺品があるらしいが見せて貰えないかと頼んだ時，それは fellow の許可がないと自分にはあけられない，自分にはコモン・ルームをあける権限はないといって，断られてしまった．後で気づいたのであるが，結局，porter というのは college の人間ではなく，単なる雇われにすぎないらしいのだ．college の施設に対して一切何の権限も，もちえぬ存在らしいのだ．それにしても，いやそれならばなおのこと，ケンブリッヂの例の porter はそれが丸で自分の権限であるかのような高圧的態度を示したものだ．しかしケンブリッヂのあのペンブルックでも，別のポーターにグレイの少年時代の肖像画を見せ，この絵がこの学寮にある筈だが知ないかときいたら，「知らない，そんな大切なもの（treasure といった）は自分など見ることだってできない」といって，ひどく辟易した風であったことなど考え合わすと，porter などというのは，そうした存在なのであろう．そこに気づかず日本流に考え，受付けならどうにかして外来者たるこちらの要件を取りなすものと考える．porter など頼りになるべき存在ではないと本当に気付いたのは，三度目のケンブリッヂ訪問をおえてからのことだった．

ペンブルックの Common Room は見ることができた．それは Mrs. Cordy という librarian の好意によるものであった．夏休みで学生も教師も出払ってはいるが，一部職員は office に残っているらしい．libraian なるものが学内でどんな地位をしめるのか知らないが，とにかくコーディ夫人が四時に来るようにという．この四時という時間はイギリスでは，特にコレッヂでは意味があるのかどうか．同じ日，T先生夫妻はベイリオール・コレッヂ（Balliol College）の図書館を訪ね，そこの Browning の Yellow Book を見せてくれるよう依頼された．その時もそこの librarian は四時のアポイントメントをしたという．四時が仕事の引け時間なのかも知れない．

Common Room は gatehouse の西側の奥にある．ジョンソンの部屋の下の gateway をくぐって最初の中庭（quad）に出ると，その西側の建物の中程のところにトンネルのようにあいた小さな通用口が見える．これをくぐって裏へ抜けると，第二の中庭に出る．目の前の芝生に立札が立っていた— "Please Do Not Walk on the Lawn." 真向いに，中庭のグリーンを隔てて，つたで青々としたチャペルとその塔．右手（北側）にはこれまた窓だけ残して全面，壁はつたでおおわれた四階建ての白味をおびた破風付建物，そして左手は2，3mの高さの石塀．グリーンの芝生の上では3，4人の男たちが bowls（球ころがし）を楽しんでいた．コモン・ルームはこの右手の建物のこちら側東端あたりの一階にあった．中庭に面しているドアをあけると，更に左右に一つづつドアがある．まず左のドアのロックをはずし開けると，中は南北に細長い小さな部屋になっていて，長い木のテーブルが横に長く一列に並んでいた．そのテーブルには両側に互に向い合うように木の椅子がきちんと並べてあった．長く並んだテーブルの中央あたり，マントルピースの上方にひときわ大きなジョンソンの肖像画が金縁の額に入ってかかっていた．コーディ夫人が説明してくれる前にジョンソンと分かる有名なあの絵——左手で横腹をかかえ込むようなポーズをした——あのジョンソンだ．Jeshue Reynolds の傑作である．北側の奥には，そこが正面らしく，このコレッヂのマスターでもあろうか，更に大きな肖像画がかかっていた．ジョンソンと反対の東側の壁にも数点の肖像画があった．ここがコモン・ルームかとたずねると，コーディ夫人は，そうです，教師が昼食をとるところですといった："Fellows, or teachers, take lunch here." 'fellow' といって 'teacher' といいかえたところが印象的であった．そこを出ると，夫人はすぐロックし，今度は別の key で向いのドアを

開けた．ここは前のより広く正方形に近い部屋で，多少豪華な感じがした．円いティー・テーブルが中央にあり，ソファーやジョージアンかヴィクトリアンの赤い別珍の立派な椅子があった．新聞や雑誌が別のテーブルの上においてあった．ここは新聞を読んだり雑談をしたりする部屋だという．左手の奥の角にガラス戸の入った飾り棚が据てあり，その中に陶器の tea-pot と mug がおいてあった．tea-pot はジョンソン愛用の急須だという．白地にうすい紺の草花の模様をあしらってあった．いかにも茶人好みを思わせる淡白でフォルムのシンプルな急須だ．ジョンソンの茶人振りは有名で，Boswell は「茶で夕べを楽しみ，茶をもって夜中の慰めとし，茶を飲んで朝をむかえた」と伝えている程だ．mug はコーディ夫人によると，ジョンソンがそれでよく ale を飲んだのだという．そのそばに古びた小さな書生机があった．飴色をした木の机であった．この机はコレッヂの時分に使った机かと思えば，英語辞典の作製に用いたものとは夫人の説明．後日，ロンドンの Gough にあるジョンソンが辞典の作業をしたという家を訪ねた時，この机のことはすっかり忘れて，そこにも辞典の作業に用いたという同じ机がありはしないか確かめてみなかったのは迂闊であった．夫人の言う通り，辞典編纂に用いた机とあらば，彼の 'oat' の有名な定義を思い出さずにはおれまい．ロンドンの前述の家を訪ねると，ジョンソンの英語辞典が机の上においてあり，訪問者が引いてみられる．ためしに 'oat' の項を引くと，そこはボロボロになって，セロテープが縦横にはりつけられていた．それでも何とか読みとれたのは嬉しかった．南側の大きな窓の下には，辞典を作った時のカードというのが雑然と大机の上に積まれていた．

この部屋を出て，中庭の東側沿いを通用口の方へもどっている時，すぐそばの左側の建物の窓が丁度我々の足元付近の位置にあった．その窓のすりガラスの向うに，人影のようなものがぼんやり見えた．コーディ夫人はあれがジョンソンの bust ですといった．bust が図書館にあることはきいていたが，その時は特に見たい気もしなかったので，見られるかどうか聞いてもみなかった．bust の話はそれ切りであった．gateway のところまできて，別れしなに，コーディ夫人はちょっと待てといって，コレッヂのパンフレットを二部もってきてくれた．頂戴したパンフレットに何が書いてあったか読まないうちに，旅先きで紛失してしまった．惜しまれてならない．

2. Cambridge

グレイは1734年9月に Peterhouse に入学して以来，大陸旅行をはさむ一時期の四年間と大英博物館で勉強した三年足らずを除けば，彼の生活と研究の本拠地は，その死の1771に到るまで，ケンブリッヂであったといってよい．もっとも，彼はよく旅行に出かけたし，ロンドンへは終生，また1759年まではストウク・ポウヂズへもちょくちょく出向きはした．一般に言われるようにグレイはケンブリッヂに世俗を離れて隠棲したのではなさそうである．少なくともケンブリッヂを好んでそうしたとは言いがたい．それでなければあんなに頻繁にロンドンへ出て行く筈も必要もない．彼の書簡集をちょっと拾い読みするだけで，まさに尻のあたたまる間もない程ロンドンへ出ていることが分かる．彼は決してケンブリッヂが好きであった訳ではない．事実，グレイは1735年には早くもケンブリッヂが嫌いだともらしているし，1738年には一端やめて引上げさえしている．また後年には「学生のいない時はよい」と言っているが，これとて決してケンブリッヂそのものを好んでの言ではない．誰からも邪魔・妨害される恐れのない一時の自由をよろこんでいったにすぎないのであろう．晩年のケンブリッヂにおけるグレイはみじめであったという他ない．特に学問に打ち込むでもない，詩作に励むでもない．ただ，やたらと自分がいやになって，ロンドンへ出る機会がなかったり，旅行に出かけることのない時は，ケンブリッヂに逼塞している他なかった．それにもかかわらずケンブリッヂを離れず，この地が終焉の地になってしまったのは，グレイにしてみれば，ただそうするほかなかったからにすぎないように思える．決してケンブリッヂが好きであってのことではあるまい．確実に言えることは，もしグレイがスピード嬢（Miss Speed）と結婚していたら，彼はケンブリッヂを去っていたであろうということた*．

このケンブリッヂを筆者は都合3度訪ねた．1度はオックスフォードから．忘れもしない，それはグレイの命日に当る7月30日であった．2度目は8月12日で Chester からであった．3度の9月4日はグループの York

* 当時は結婚したらコレッヂを辞すのが慣行化されていた．1714年には，この慣行に従って，fellowを辞した Francis Mundy がペンブルック・コレッヂの同寮にあてて出した挨拶状が同コレッヂのパンフレットには載っている．

からケンブリッヂへの移動に従ったものであった.

オックスフォートからはバス(coach という)で3時間足らずでケンブリッヂへ行ける. オックスフォードの長距離バス乗り場(coach tation または bus station という)は Martyrs Memorial (殉教者記念塔)の南コーンマーケット通りの始まる十字路を西へ折れれば近い, グロスター・グリーン (Gloucester. Green) にある. ここからケンブリッヂの繁華街 St. Andrew's Street のすぐ南にあるドラマー通り(Drummer Street)の Bus Station までパーシバル自動車会社 (Percival's Mortors LTD) のバスが一日上下 2本づつ走っている. おもしろいことにこの二本は9時15分, 18時15分に各々同時にオックスフォード, ケンブリッヂを発車し, 同じ時刻に反対側に着く. 年間無休運転である. 金, 土, 日はこれに1本増発され14時15分に出る. これも1年中変りなく走る. 料金がまたおもしろい. 片道切符 SINGLE £ 1.60p, 日帰り往復切符 DAY RETURN £1.80p, 期間往復切符 PERIOD RETURN £ 2.90 p といった具合である. 列車でも同じで, 種々の切符が用意されているときく. バスはワンマンカーで, 途中バス停で客があると, 運転手は自からドアをあけ, 客の重い荷はもって上げてやる. 実に親切だ. 途中, Midland の田園風景が千草を作る情景などもあって印象的だった.

2度目はケンブリッヂのペンブルック・コレッヂの Dr. Jack からの手紙を携帯しての旅であった. これは前回グレイの稿本を見せて貰う目的でペンブルックの図書館を訪ねたが果せず, そこの司書に 'pofessor' の許可 (permission) を貰らって来るようにいわれ, その許可を乞う書状をオックスフォードから出しておいた, それに対する返事であった. それは一葉のハガキで, 8月8日ブリストルのホテルに着いた時受取ったものだった. 表の左肩に 'TO AWAIT ARRIVAL' と書いてあった. 「着待ち」とでも言うのか, 便利な言葉だ. この葉書には, 9月になると図書館はずっとしまる, 自分はカナダへ行くし, 助手は休暇を取る, 8月26日までなら何とか役に立てるというのであった. 次の滞在地はチェスター (Chester), その次はケズィック (Keswick) とだんだん北上して遠ざかる. それで8月12日チェスターから出かけることにした. 今度は鉄道である. 駅には大ていその路線にのっかっている駅までの区間専用の軽便な時間表をおいている. 小さく名刺大に折りたたんだ(場合によっては一枚の名刺大のカードであることもある)時間表 (time table) で, 表には, たとえば, Chester/London とか Cambridge/London などと上下に並べて書いてある. これには食堂車, 飲食物の有無, 乗り換え駅等も一目で分かるように書いてある. 駅で云えば貰えるし, ロンドンのユーストン (Euston) やキングズ・クロス駅 (King's Cross) のような大きな駅では, 勝手に取れるようにおいてある. 勿論, 大きな電話帳のような時間表もあるが, この時間表と鉄道路線図さえあればどこへでも行けよう. ユーストン駅でこの国鉄全線図を貰ったが, それには次のように書いてあった: British Rail/Passenger/Network 1975' しかし時折り発着ホームが変ることがあるのは止むをえない. 駅員にたしかめて乗るに限る.

チェスターからケンブリッヂへ鉄道で行く場合はやや複雑だ. クルー (Crewe) で 'Inter City' に乗りかえユーストンに達する. そこから tube*でキングズ・クロス駅へわたり, ケンブリッヂ行きに乗る. ロンドンにはいくつもの駅があって, 行く方角によって始発駅が異なる. ここの駅の駅員は日本の明治時代の鉄道員のような服装をしていた. ケンブリッヂ線はやたらとローカル・トレインの多い線であった. チェスターからロンドンまで3時間, ロンドンからケンブリッヂまでおよそ1時間半程度, 運賃はシングルで8ポンド80ペンスくらいであった. ケンブリッヂ駅の出口を出る時, 駅員に切符を記念に欲しいというと, ペンで無効の印を入れて返してくれた. 駅は市街地から南西の方向に当る郊外にあった. この夜, トランピントン通り (Trumpinton Street) のフィッツウイリアム博物館のとなりのケンブリッヂ・ロイヤル・ホテルの前のレンズフィールド通りで, 一種の民宿 Bed & Breakfast (通称, BB「ビー・ビー」)に投宿. ロイヤル・ホテルは, これより20日ばかり後に団体できて泊ることになる. この BB の女将 landlady の旦那がこの日図書館を訪ねたペンブルック・コレッヂのポーターであることを翌朝知った時には, 偶然とはいえ, その奇縁に驚いた. 先方も前日の日本人に驚いた様子だった. 或る意味では, これが契機になってグレイの少年時代の肖像画の行く方を確認できたといえる.

朝になって朝食を告げに来た男を見ると, 前日ペンブ

* Cambridge と Oxford には同一名のコレッヂが多い. 但しモードレン・コレッヂのようにスペリングが多少ちがう場合もある: Magdalen (Oxf.), Magdalene (Cam).

* '地下鉄' で, Underground ともいう. 地下鉄とはいっても郊外へ出ると地上に出る.

ルックで見た porter（例の高慢ちきな白ブタとは別人の）であった．朝食は下の応接室．そこには筆者がもって来た折紙できれいにおった箱がかざってあった．子供が折ったのだといって，女将が礼をいった．同宿者が他に二人あって，スイスとオランダの女性だった．二人とも実に流暢な英語の使い手だった．筆者が昨夜，パブで話したスイスの若者は，それほどでもなかったというと，どう思ったかオランダがあれはパラドックスだとスイスをなぐさめるようにいっていた．因みに，朝食はジュース，ベーコン・エッグ，トースト，ティーであった．宿料は全部で £ 2.25p，1,400円程度*であろうか．BB を出がけに，この夫婦にグレイの肖像画を見せ，これを見たことはないか，フィッツウィリアム（Fitswilliam Museum）できいたらアデンブルック病院（Addenbrooke's Hospital）にあるといい，病院へ行けばないというのだがともちかけてみた．フィッツウィリアムの誰にきいたかと旦那がただす．'attendant in charge'（画廊の見張案内役で，会場をぶらぶらしている）だと答えると，オフィスにきいてみろといってくれたのであった．

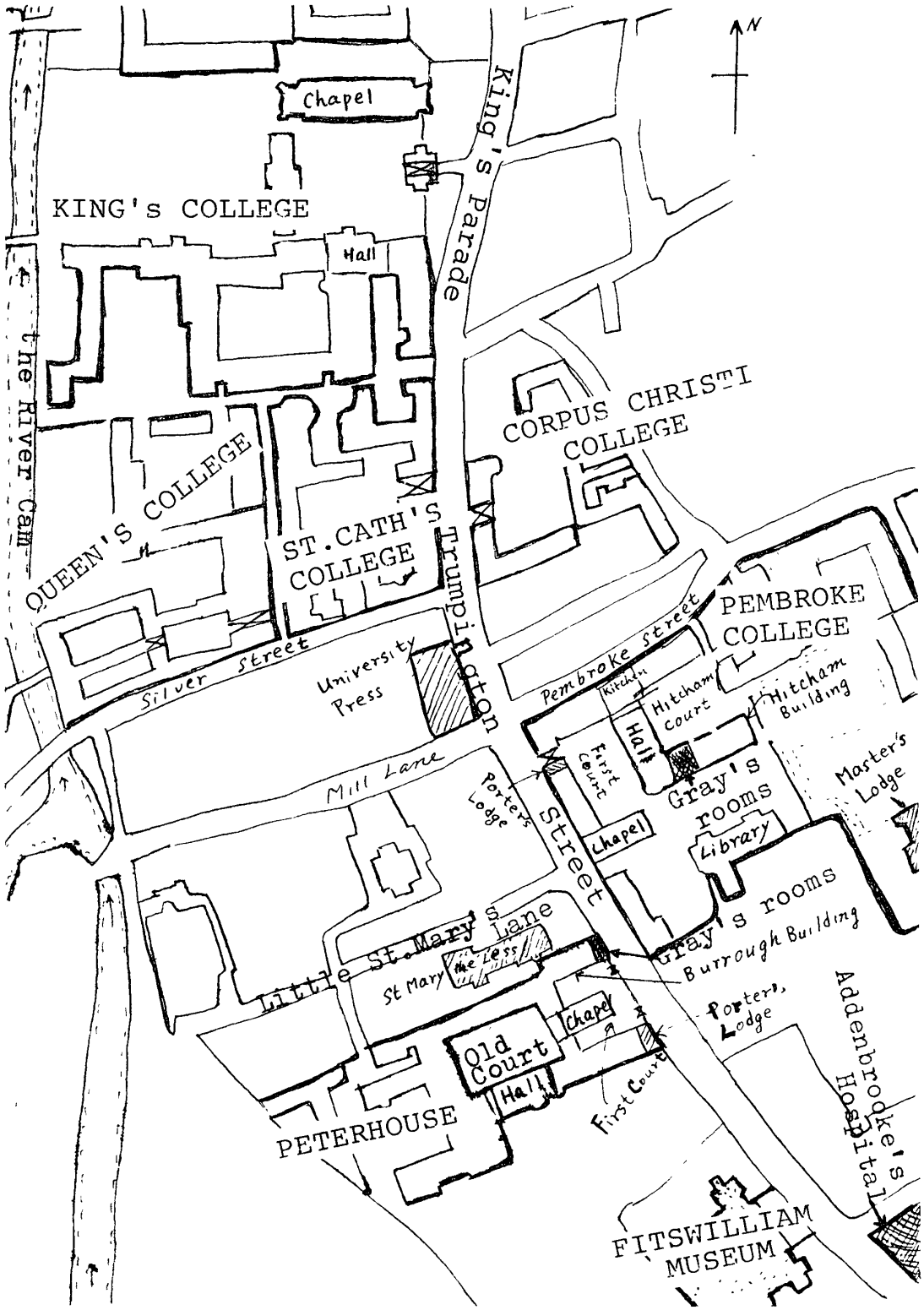
ケンブリッヂの現在（1975年）の人口は98,500．オックスフォードよりもこじんまりとしていて田舎びている．けれども夏にはオックスフィード以上に旅行客でごった返す．また，外国人のための語学講習が非常に盛んでにぎわう．ある外国人は，その語学学校の自分の教室は15名中12名が日本人だ，まるで日本の学校へきたようだとこぼしていたが，それほど日本人が多い．キングズ・コレッヂの庭の芝生には，「立入禁止」の漢字の立札が見られたほどだ．グランタ川（Granta），通称キャム川（the Cam）が南から北へ町をだき込むようにしてゆるやかに流れている．このキャムと並行して南から北へトランピントン通り，キングズ・パレード（King's Parade），トリニティ通り（Trinity Street），セント・ジョン通り（St. John's Street）と一本の道が走る．主だったコレッヂはキャムを背にこの道路沿いに並び建っている．この道路がさしずめオックスフォードの High に相当するであろうが，実際にはオックスフォードの「ハイ」に対抗して，ケンブリッヂでは裏手を流れるしだれ柳のキャム川を自慢する．各コレッヂの裏のこのキャム川沿いは広いグリーンの広場で backs「バックス」と通称されている．

ケンブリッヂはコレッヂ数23で，オックスフォードより大分少ない．もっとも，この他に University（大学連盟）に加盟していない院生校（graduate school）が6校ばかりあり，合わせれば30校近くにはなる．このうち3校は女子大である．

グレイの Peterhouse と Pembroke College は，まるでオックスフォードのクライスト・チャーチとペンブルック・コレッヂのように，トランピントン通りをはさんで，向い合って立っている．ピーターハウスから少し南に下ると，次がフィッツウィリアム博物館．この通りを逆に北上してキングズ・パレードにさしかかると，すぐ左がグレイの友人 Walpole, Ashton の母校キングズ・コレッヂ．その北に Senate House があり，1769年，ここでグラフトン侯（Duke of Grafton）の総長 Chancellar 就任の式典が行なわれた時，グレイの詩「楽曲用頌詩」（Ode for Music）が曲をつけられ歌われたという．この頌詩はグレイの申し出で作られたのであったが，評判が悪く，彼は大いに気に病み自信をなくした．この後，彼の詩作活動は急止したことを考えると，余程，この不評がこたえたものと思われる．このグレイの祝歌は大学側の式典プログラムと共に公表され，それが新聞にまで掲載される始末で，グレイとしては何とも耐えがたい恥さらしであった．彼はこの詩作を後悔し，ひどい自己嫌悪におちいっている．翌年，この式場で行なわれた卒業式に出席することを嫌ったのも，グレイにとっては'悪夢'がそこにはまつわりついていたからかも知れない．この Senate House の向いは，今日なお活気を呈する市場（market place）である．この辺りが大体町の中心地点であろう．

Peterhouse（1284創立．ケンブリッヂ最古，最小のコレッヂ．学生数250．）トランピントン通り西側に面して，二つの建物が中に chapel をはさんで，丁度E文字を画くように東西に長く横たわっている．チャペルは1628年から1634年の Matthew Wren（クリストファ・レンの叔父）の学寮長（master）時代の建立．南側の赤レンガの建物は 16 c から17c 始めのもので，二階には図書館・その下の一階東端の道路側にポーターズ・ロッヂがある．北側の淡黄色をおびた Ketton lime stone の3階建の建物は 18c のもので，4年がかりで1742年に完成した．設計者のサー・ジェイムズ・バロウ（Sir James Burrough）の名にちなんで，バロウズ・ビル（Burrough's Building）と呼ばれている．この東側道路端の3階がグレイの部屋である．道路に面する東面と南面はケットン石が使われているが，裏の小セント・メアリ教会の境内へまわると，この建物の北面はレンガ造りであ

* 最近（1976～77年）はポンドが下がり，500円を割っているときく，'77年現在では1,000円程度か．



ることが分かる．このグレイの部屋のある建物と porter's lodge のある南側の建物との間をファースト・コート (First Court) といい，通りに面した2つの 18c の鉄格子の門が入口だ．チャペル横をつき抜けると，四面建物に囲まれたコート (court) がある．これは Old Court と呼ばれ，バロウ・ビルのできるまではピータ

ーハウス唯一のコートであった．左手の一角の古い建物はホール（hall，食堂）で，1290年の建立．最も古い建物である．

T．グレイは1734年10月9日にイートン（Eton）からpensionerとして入学してきた．当時16の学寮があった中で，彼がこのピーターハウスをえらんだのには叔父の一人*が数年前までここのfellowをしていたことが上げられる．グレイによる**と，当時ケンブリッヂには町教会（parish）14，コレッヂ12，ホール4があったとして，collegeとhallの区別をしているが，これはグレイの誤りである．コレッヂとホールは同じものである．ペンブルックなども当時はホールで，'Pembroke Hall'と呼んだ．今日なお'ホール'で呼ばれつづけているのはトリニティ・ホール（Trinity Hall）だけである．グレイの部屋が前述のトランピントン通りに面した3階の部屋であることはよく知られている．うらの北面の窓枠に鉄の棒がついているのですぐ分かる．しかし，これは彼が1742年に復学してからの部屋であって，それより以前の部屋については不明である．ただ，1734年10月31日の手紙で，大きな一部屋におちついたとウォルポウルに伝えている（'I am got into a room ; such a hugeous one that little i is quite lost in it.'）．また，当時中庭は今日のold courtが一つしかなかったのであるが，その中庭が朝ドアをあけると一面に見えるといっている***．したがって，グレイの最初の部屋はオールド・コートに面する一階にあり，living roomにbedが入っていた大部屋一つであったということになる．今日，夏にそこらあたりを見ると，窓という窓からゼラニュウムの赤い花がこぼれおちるように咲いている．

グレイはここでの生活にとけ込めなかった．コレッヂの長，学寮長であるmasterは気違いのように誇りが高く，教師たるfellow（研究員）は飲みすけのねぼすけで，何もものを知らない退屈きわまりない代もので，学生であるpensionerは勉強はせずaleをのみ歌をうたってどんちゃん騒ぎばかりやる徒だといって，沈滞したケンブリッヂの学風を批判し，嫌悪している．こうした荒くれの学生達の中にあれば，グレイが'Miss Gray'とあだ名されるのも当然かも知れない．彼はここでの単調な生活を送る自分を粉ひきうすを引く馬になぞらえている．ウェストの影響もあっただろう，1738年9月ピーターハウスを引き上げてロンドンへ帰ってしまう．

四年後の1742年に再入学した時，グレイは新築なったばかりのNew Building，今日のバロウ・ビルに入居した．今度は部屋は複数であった，が3階の道路端である．裏は聖メアリ教会の墓地である．今日見ても決してよい位置とは思えない．彼はここで14年間，fellow-commoner（特別研究生）として，古典，特にギリシャ文学の研究をした．翌1743年12月にはLL．B（法学士）の学位をうけた．この東端3階の部屋の裏側には，今日でも，一番道路側の窓枠にiron bar（鉄棒）が見える．これはグレイ自身が取りつけたものであることは余りにも有名である．このbarのある窓の部屋がbed roomであった．これは彼が火事をおそれる余り，非常の場合にそなえての付設であった．barは両端をstanchions（支柱）で窓枠に固定し，window sill（下のしきい）の前面より前へとび出すようにしつらえてある．これは縄梯子（rope ladder）が壁から離れて降りやすくするためであった．この縄梯子もロンドンに居た友人のトマス・ホートン(Thomas Wharton)*に1756年1月にたのんで求めさせている．その時の細かな注文を見ると，ロープは絹のようにやわらかで軽いこと．それにbarにひっかけるための金具をつけるように指示している．

火事についてはまた後に触れる機会もあろうが，大火（1666）以後も，ロンドンでは頻繁にあった．グレイは子供の時からそれを見聞きしていたであろう．1748年にはロンドンの自分の家を焼く大火事もあった．これが火事をおそれる最大の原因なのかも知れない．これ以来，用心深くなったらしい．たとえば1753年には友人ウイリアム・メイソン（William Mason）にロンドンのジャーミン通り（Jermyn St.）に下宿を探させているが，「3階だったら，道路に面していない場合はだめだ」と用心深い．

グレイのこの火事恐怖症は大学でも有名で，1756年2月の夜，いたずら者の学生がおもしろ半分に階下から「火事！火事！」と叫んで，グレイのこの縄梯子のお手並を拝見せんとした話が伝わっている．グレイは驚いてとびおき，barの上の窓から外の様子をうかがい，すぐまたベッドへもどった．外から様子をうかがっていた腕白

* グレイの母親の兄，Robert Antrobus（1679—1730）で，彼はイートン校にも長くつとめグレイの面倒をよく見た．

** 1734年10月31日 Walpole の手紙で．

*** 1735年1月14日 Walpole への手紙．

* 1717—1794，生涯の親友．Pembroke College, Camb．卒，1739—1747までペンブルックのfellow 1747年結婚のため，fellowを辞す．医者．

どもの目には，白いナイトキャップが窓ごしに動くのが見えた．がそれ以上は何ごともなかったというのが事実らしい．しかし話ではその後があって，グレイは縄梯子を使って着のみ着のまま降り，その下に水をはって置いてあった桶の中に落ち込んだという話しもある．待ちかまえるヤジ馬の罵声，洪笑の中を，かけつけた友人ストウンヒューワ（Richard Stonhewer*）が，寒さにふるえるグレイを通りかかった夜警の外套にくるんで学寮に運び込んだともいう．しかしこれはこの種の話につきものの尾ひれである．

この部屋の中を見ることはできなかった．Office（porter's lodge ではなく）でたのんだら，「今はフェロー（fellow）が住んでいるからできない」と言われた．それではそのフェローに会ってやれと考え，3階まで上ったが，ドアはロックされていた．Dr. Hinton が現在のこの部屋の居住者であった．1935年頃は Prof. Temperley という人が住んでいたらしい．

Hall（食堂）へ行くとグレイの stained glass（ステンド・グラス）がある．チャペルと同様東に向いているこの古いホールは，まさしく 'west front' の西側入口から入ると，正面に教官席 dias が一段高くしつらえてある．右側，つまり南面には古い fireplace があり，その fireback には向い合って立った馬と一角獣のささえる James I の紋章（arms）が入っていた．反対の北面にnorth window が三つあるが，その中央の窓に3枚のステンド・グラスが並んでいる．その左端がグレイを記念するものであった．注意して見ないと見落してしまうような小さな文字で Thomas Gray の名が読める．人物の立姿の下に，グレイの獅子の紋章が入っていた．右どなりは William Morris のものであった．1870年にこの Hall を修復しているので，恐らくその頃のものと思われる．

グレイが1756年3月にピーターハウスを去って，ペンブルックに移ったのは，上記の火事騒ぎ事件が直接の原因であった．「同じ階段に住む2,3の若者が乱暴で夜中によくおこした．当局へ文句をいったが，配慮されなかった」ためだとメイソン*はいっている．これを裏付けるようにグレイ自身W．ホートンへあてた手紙**でこう書いている：「ピーターハウスとけんかをし，ペンブルックへ移転することで忙しくしていた．」（'・・・ having been taken up in quarrelling with Peterhouse, & in removing myself from thence to Pembroke.'）

Pembroke College 1347年創立．現在の構成員は学寮長（master）を頭に，フェロー（fellow）45名，院生（graduate）およそ90名（うち70名は研究に従事），学生（undergraduate）300～350名という500名近い大世帯．

グレイがピーターハウスからここへ移ってきたのは，1756年3月5日であった．彼の同年の手帳には 'Admitted to Pembroke, March 5, 1756' とあり．トランピントン通りから gateway（正門）をくぐると，前に緑のコート（court）がひらけ，左手に porter's lodge，右手に最初のチャペルであった 'Old Library' がある．そのまま，まっすぐこのコートの北面沿いにすすみ，Hall（食堂）の北端入口と調理場（Kitchen）の間を抜けると，そこはまた別のコートだ．これは古くは New Court, Inner Caurt, Ivy Court ともいったのであるが，現在は普通，Hitcham Court（ヒッチャム・コート）と呼んでいる．このコートの南面を画して，ホールの南端と直角に接する3階建のレンガ造の建物が東西に長く横わっている．この建物は Hitcham Building（ヒッチャム・ビルディング）といい，17 c に建てられたものだ．このホール（食堂）に接にする西端の一角が今日，グレイの部屋（The Thomas Gray Room）として，我々が見ることのできる部屋である．しかしこれは実際には，大分後になって彼が住みつくようになった部屋である．グレイが1756年3月5日に移ってきた時は，彼は誰か他人の部屋を借用したらしい．それほどグレイの移転は緊急を要したのであろう．彼は最初2年以上，コレッヂから部屋を貰ってはおらず，誰か不在のフェローの部屋を使

* グレイの友人，1749—50 Trinity College, Cam で B. A. を取る．1751より Petrehouse のfellow であった．1768年グレイの近代史教授任命に尽力す．Mason とも親しく，彼よりゆずりうけたグレイの遺品をペンブルックに寄贈．Commonplace Book 3 vlos，肖像画などがそれである．

* グレイの若い友人．グレイの信任厚く，遺言執行人になった．この事件の頃はペンブルックの fellow．グレイ死後，グレイの biographer として知られる．

** 1756年3月25日付

用させてもらっていたものと思われる．不在借室者というのは珍しいことではなく，後にグレイ自身も貰ったばかりの現在の'グレイの部屋'を空けている．1758年6月末から1761年の終までロンドンの大英博物館へ出向いていた時期がそれで，わずかに1760年及びその翌年の夏と数回の短期帰省のほかはずっと不在者になっている．推測の域を出ないが，1756年3月5日にはじめて移ってきた当初の部屋は，同じヒッチャン・ビルで，今の'グレイの部屋'の東どなりで，寝室つきの chamber であったらしい．これはペンブルックの学寮貸室帳（College Rent-Book）によると，No. 42 の chamber で借室者は Mr. Delaval となっている．恐らくこの不在借室者デラバル氏の部屋に借室者はそのままにして，グレイが入ることになったものと思える．入居20日後の3月25日にはホートンに手紙を遣り，通りから離れたこの部屋をグレイは実に閑静なり('as quiet as at Grande Chartreuse')といってよろこんでいる．2年後，彼はその西隣りの部屋 No. 39に移っている．これがいわゆる'グレイの部屋'で，1758年6月にそれまでの居住者フォレスター（Mr. Forester）なる男が借室を辞退して，グレイに属するところとなった．この時から，グレイはコレッヂから部屋の割当を貰うことになり，その名前がはじめて借室者名簿に出る．この部屋はヒッチャム・ビルの西の staircase より西側のかなり広い二階全部を占めている．元来，ここはマスターズ・ロッヂの一部とする目的で設けられた部屋である．学寮長（master）の応接室にでもあてていたのであろうか．以前は仕切りのない一つの parlor であった．グレイの時代には勿論，居間，書斉，寝室に区切られていた．コートに立って北側より見ると，この部分だけが他の部分と違ったファサード（façade）をもっている．他の部分はみな赤茶けたレンガなのに，ここだけは淡黄色の石の壁面で，シンプルなルネッサンス様式の装飾を施されている．3階あたりの高いところに何やら紋章らしいものもついている．窓も他の部分に比べて，大きく長い．今日ではどうなっているか分からないが，当時はこの部屋は学寮長マスターの所有で，借室料も学寮長に支払っている．グレイはこの部屋のために，年額コレッヂに2ポンドとマスターに6ポンドの支払いをしている．この部屋だけでグレイは年間8ポンド支払っている．ちなみに，1748年にロンドンのコーンヒルの生家を焼失し，再建しているが，650ポンドかかっている．それを考えると，大体その$\frac{1}{80}$に当り学寮内の家賃がそれほど安くないことが分かる．これでも一般の下宿屋にくらべれば安い．1753年にメイソンに下宿探しを依頼した時の条件に1週半ギニー以上は出せぬといっているところを見れば，コレッヂはまだまだ安い．ところで8ポンド支払うこの'グレイの部屋'は，グレイの前には1747年まで友人ホートンが居住しており，グレイ没後2年の1773年には小ピット（The Younger Pitt）の William Pitt（1759—1806）が入居している．この部屋が何年頃から今日のような common room になったのかは不祥．

グレイは他にも借室をしている．1761年の新学期ミカルマス・ターム（'Michaelmas Term'*）（10月—12月）にはヒッチャム・コートをはさんで真向いにある部屋，現在の調理場や office のあるあたりにもう一部屋借りた．これは自分の servant と増える蔵書のためであった．しかし不便だったのか，翌1762年には，自室の真上3階の部屋 No. 40を借室しかえている．この借室料は年3ポンド10シリング．

現在の'グレイの部屋'はフェローたちがお茶を飲んだり雑談したりするのに使うという．階段の入口にも部屋の入口にも 'The Thomas Gray Room' という表示が出ている．その大きな部屋の中はじゅうたんが敷かれ，大きなテーブル，ふくよかなソファがあり，今まで見たどのコモン・ルームよりも立派であった．壁にはグレイとスピード嬢の肖像画がかかっていた．入口は部屋の北東の角にあり，そのドアを開けると，真向いの西の壁に中年グレイの肖像画がまず目に入る．フレームに銅板がはってあり，次のような文字あり：'Thomas Gray（1716—1771）Fellow Commoner, by Benjamin Wilson/Given by Richard Stonhewer, 1809' これは遺言によりメイソンがもっていたものを，友人ストウンヒューワが譲りうけコレッヂに寄贈したもの．

南側の中央付近にある暖炉の上方の壁面には，*Eton Ode* の原稿を手にした Gray があった．黒の上衣にタイもつけないで白いシャッのカラーが無造作にとび出したくつろいだ恰好をしている．銅板に次の如し：

---

* イギリスの大学は三学期制で10月に新学期が始まり，6月（または7月）に学年が終って long vacation に入るのが普通．Oxford, Combridge とも第1学期 Michaelmas Term（10—12月）というのは同じであるが，二学期からに各々次のようになる．二学期（1月—3月）：Lent Term（Camb.）Hilary Term（Oxf.）　三学期（4—6月）：Easter Term（Camb.），Trinity Term（Oxf.）

'Thomas Gray, (1716—1771) : Poet by John Giles Eccardt'* この絵はウォルポウルが所蔵していたもので，彼が *Eton Ode* 出版を祝して画かせたもの．それは1747だったとウォルポウルはいうが，グレイは1748の手紙** で 'sit for my picture' と言っている．手にしている *Eton Ode* の原稿は友人ウォルポウルが自から書いたものという．現在原画はロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリーにある．

東側の壁面にはグレイとのロンマスも一部ささやかれた Miss speedの肖像画．彼女は後にある伯爵と結婚*** する．彼女はストウク・ポウヂズの地主屋敷に住むコッバム夫人 (Lady Cobham) の姪で，グレイと親しく交際のあった女性だ．銅板に次の如し：'Henrietta Speed by Petetr Falconet' 少し年取ってからの肖像画と思われる．髪を結いあげ，その上から黒のショールをかぶった横向きの顔は中年の顔と見た．楕円形のフレームに入っていた．

この他に北側の壁に小さなシルエットが一枚あったが，これは複製****であろう．後に Fitswilliam Museum で，その原画と思えるものをみた時，裏に「フィッウィリアム購入」とあったから．次の如し：'Profile of Mr. Gray, drawn by Mr. Mapletoft, 1765' シルエットは18cの当時非常に流行っていた．

部屋が1つなのを不思議に思い，区切りは取払ったのかというと，案内の司書はそうだと思うといった．しかしその時の自信のない返事と，後に居間はおそろしく広く，study (書斉) はひどくせまかったと知り，あるいはその奥に当時の study, bed room が南北に並んでいたのかも知れない．司書の言を信ずるなら，今日の状態はグレイやホートンが入居した以前の Master の Parlor としての原形に復したといえるのであり，この大部屋のどの部分かでグレイは息を引きとったことになる．前回訪ねて断わられたのは7月30日で，グレイの命日に当った．それを図書館でいうと，そうでしたかとその司書はいっていたのを思い出す．

グレイはこの広い部屋にハープシコードをおいて，時折弾いていたという．窓辺には植木鉢を沢山ならべ花を楽しんだ．しかし晩年は Hall へも行かず自室で食事をしたり，外出も殆んどせずここに閉塞し孤独な日々であった．

このグレイは1771年の五月半ばからロンドンに居た．そしてケンブリッヂに帰えれないほど弱っていた．医者のすすめで6月22，3日頃，空気のよい Kensington に療養のため移った．gout* (痛風) が高じて胃にきていたという．ケンブリッヂに帰えれたのは7月22日であった．その2日後の24日，Hall で夕食中急に気分が悪くなり，このヒッチャム・ビル No. 39の自宅へ運び込まれた．そして5日後の29日 (日曜日)，急に激しいさし込みにおそわれた．これは翌30日死ぬまで続いたという．ストウンヒューワや医者のギズボン博士 (Dr. Gisborne) が30日にはロンドンから駆けつけた．学寮長のブラウン (James Brown*) に遺言書の場所がやっといえるという有様だった．そしてこの30日夜11時頃静かに息を引きとったという．最後のことばは従妹のメアリ・アントロバス***にいった「モリー，もうだめだよ」(Molly, I shall die.') であった．行年54才．遺体は遺言に従って，母親の眠るストウク・ポウヂズの教会へロンドンを経由して移された．

ここの図書館にはグレイの Commonplace Book (備忘録) 3巻がある．これはグレイの詩稿，メモ，小論考，本への書き込み，気付き等を集めたものだ．Prof. Jack からのハガキをもって，2度目にこの図書館を訪ねた時には，今度はジャック博士から予め連絡があったのか，こちらから言う先きに，前回と同じ司書が奥から濃紺の木箱を出してきた．それを明るい机の上において，key で unlock した．箱の蓋の真ん中あたりに金具の取っ手がついていて，その下に小さく，'Gray's Mss' の文字が見えた．司書は中から赤い色をした皮表紙の書物を3冊取り出してならべた．そして「エレジー」('*Elegy*') の原稿の部分を開いて，どうぞごゆっくりといった．それを写真にとろうとしたら，司書はこばんだ．赤い皮表紙

* 'Eckhardt' とも書く．

** 1748年6月5日の Thomas Wharton への手紙

*** Henrietta Jane Speed. Baron of de la Peyriére という10才年下の若い男と1761年に結婚，イギリスを去る．Lake Geneva 湖畔のヴィリ (viry) へ行く．

**** 原画かも知れない．W. Ketton Cremer は Mapletoft のプロフィルは多く，ペンブルックにもあるといっている．「トマス・グレイ」参照．

* W. Ketton-Cremer は病名を尿毒症 'Uraemia' だとしている．cf.「トマス・グレイ」P. 265.

** グレイの友人であり，遺言執行人の一人．cf. p. 18 (左) 脚注*

*** Mary Antrobus 1732年生れ．グレイの母の弟 Willian Antrobus の娘．イートンの教師．

の背の上の方に黒い帯が入り，その帯に金文字で次のように抜いてあった：'THOMAS GRAY'S/COMMON-PLACE/BOOK/VOL. 1'

Elegy は第2巻の PP. 617—618にかけて出ている：

Elegy, written in a Country-Church Yard, 1750

余白（margin）に10, 20, ……と行数の書き込みがあり，テキストのところどころに下線が施してありその横の余白に書込みがあった．例えば，第47行：

'Hands, that the *Reins* of Empire might have sway'd,

Rod'

この稿本は「ペンブルック稿本」（'Pembroke Ms'）というが，写しはストウク・ポウヂズの教会で売っている．このコモンプレイス・ブック（「備忘録」）3巻の内訳は，vol. I：PP. 1—461. Vol. II：PP. 462—932. Vol. III：PP. 993—1096となっている．この第三巻は余白が多いが，終りの部分に一部メイソンによるグレイの手帳からの写しが入っている．

出がけに図書館内の写真をとりかけたら，それも断わられた．同じケンブリッヂのトリニティ・コレッヂの立派な図書館では，頼んだらすぐに認めてくれたものだ．

Hall（食堂）はどこもそのコレッヂの有名人の肖像画がところせましとかかげてあるものだ．丁度，グレイの少年時代の肖像画をさがしていた時，このホールの入口のところで日本人の青年に出合った．彼はこの食堂で働いているといった．グレイのことをいうと，中を自由に見て下さいという．一巡したがグレイのものなし．エドモンド・スペンサーや小ピットの肖像画があった．スペンサーのは東側の壁にあり，グレイの死んだ年にメイソンがコレッヂに寄贈したものだった．次の如し：

Edmund Spenser (1552—1599), Schol. by Benjamin Wilson Given by William Mason 1771'

このスペンサーはグレイの尊敬する詩人で，その作品には彼からの引用や引喩が多く見られるほどだ．グレイは詩を書く時には，必ずその前にスペンサー*を読んだという．

一巡して帰って来ると，青年はコーヒーを入れて待っていてくれた．Hall での喫茶とはまた格別．思いもよらぬことであった．休暇ではないのかというと，心理学か何かの学会がこのコレッヂで開かれ，今日はおえら方が集るのだと云っていた．正面のダイアス(dias)を指して，ここの教師たちは学生が食事をおえるころやって来るんです．そして食事には必ずワインを飲むんですよ，といっていた．彼がどんなつもりで，いきなりそんなことをいうのか解しかねた，が事実は分かる．おもしろい．

Fitswilliam Museum BB の女主人とその夫にすすめられ，フィッツウイアム・ミュージアムのオフィスを訪ねる積りで，入口横の案内所で，グレイの肖像画をさがしているがオフィスはどこだときくと，それならオフィスのクラーク（clerk）Mr. Robinson にきけといって，場所を教えてくれた．

office は確か二階の西裏の方にあったと思う．ドアをノックしてロビンソン氏に面会を求めると，それは自分だから中へ入れという．40前後の男だった．グレイのパンフレットに出ている少年時代の肖像画を見せながら要件を述べると，これなら確かにあった，ちょっと待ってくれという．彼は帳面を調べ出した．やがて一枚のシルエットをもってきて，これを見たまえという．みると，ペンブルックの'グレイの部屋'で見た前述の profile だった．彼はそういって電話をかけ出した．裏をみると，'Purchased by Fitswilliam' と書いてあった．電話はペンブルック・コレッヂにかけていた．グレイの少年時代のポートレートがあるだろう，そちらに長期貸出ししてある，といっている．やがて電話をおえ，ロビンソン氏はペンブルックへ長期貸出しで出ている，コレッヂへ行ってきいてくれという．

この絵というのは，グレイが13，4才頃の肖像画で，父親の派手好みの一例とされている．作者不明だが，ゴス（Edmund Gosse）は当時流行の肖像画家ジョナサン・リチャードソン（Jonathan Richardson)*の作としている．紺の裏地のついた青い長着（ヴァン・ダイク・ドレス）をきて，椅子にかけて足を組んでいる．ブリーチの下に膝までのストッキング．あづき色の皮スリッパ．手には皮表紙の本を持っている．目は大きく輝き，鼻はとがり額は広く口の小さい，総明そうな少年である．

コレッヂの office はグレイの部屋と同じコートに面する北側の建物（調理場の東側）にあった．二階へ導かれる．かなり年配の男へ通される．例の肖像画のことを頼むと，それは，マスターズ・ロッヂにあり，今すぐには見られないという．来月（9月）10日までは学寮長は

* 友人ノートン・ニコルズは，その「グレイの思い出」の中で，このことに触れ，スペンサーを 'Spencer' と書いている．Spenser の誤りであろう．

* グレイの伝記学者 William Ketten-Cremer は Arther Pond であろうといっている．

出払っていないという．マスターズ・ロッヂ（Master's lodge）というのは学寮長マスターの宿舎だ．本人がいなければどうにもならない．ついに見ず仕舞いになった．しかし，この肖像画の所在をつきとめえたことで一種の満足感が残った．

なお，この博物館には1759年5月28日 Thomas Brown* へあてたグレイの手紙と1768年の「グレイ詩集」初版本があった：'Poems by Mr. Gray/Glasgow, Foulis Press 1768'

「詩集」は *Ode on the Death of A Favorite Cat* が開いてあった．その他，キーツの「ナイチンゲール」の原稿もあった．

King's College 1441年，Henry Ⅵ の創立．イートン校（Eton College）と姉妹校で，元来，イートンの卒業生を教育することを目的とした．前世紀までは，入学はイートン出身者に限られていたが，現在は別に Etonian に限られてはいない．このコレッヂはグレイの友人 Horace Walpole と Thomas Ashton の母校である．

ここのチャペルは，その美しい建築とクリスマス・イヴにうたう聖歌隊とで広く知られている．クリスマス・イヴには BBC がここで歌われるクリスマス・キャロルを全国に流すという．そのゴシック（Gothic）建築はウインザー城（St George's Chapel），ウエストミンスター寺院（Henry Ⅶ の礼拝堂）とならび，英国の parpendicular style の代表的傑作だ．

Hall（食堂）も絢爛豪華である．その南側一角の壁面はまさにウォルポウルー統の一角といってよい．ウォルポウルー門のポートレートが並んでいる．Hall が東西に長いのはピーター・ハウスと同じだ．広いコートを中にして北のチャペルと対峙して建っている．南側だけで入口が二つあって，西端と中央付近とにある．その中央付近の入口のすぐそばに，グレイの友人のホレイス・ウォルポウルの肖像画がある．J. Richardson の作である．いかにも女性的だ．Miss Gray ならぬ Miss Walpole といいたい絵だ．これより左へ大体次のように並んでいる．トマス・アシュトン*（J. レイノルズ，1758），ホレイショウ・ウォルポウル**，Horace の父親で初代総理大臣であるサー・ロバート・ウォルポウル，タウンゼンド***，カーライル伯のフレデリック．これが西端の入口までつづいていた．

外へ出るとチャペルの壮大な雄姿がコートの向うに見える．チャペルの west front（西正面入口）へ廻ると，そこは広々とした芝生で，キャム（Cam）川の流れの向こうへグリーンのバックス（backs）が続く．この辺りはケンブリッヂで最も美しいところだ．

（昭和51年10月7日受理）

* グレイの友人で，後に Pembroke College の Master になった（1770）．グレイの遺言執行人の一人．

* Thomas Ashton（1716—1775），Lancaster の school master の息子．イートンでグレイ，ウエスト，ウォルポウルと知る．1733年 King's College に入学，1738年にはキングズ・コレッヂの fellow．1745年には fellow of Eton になる．1760年結婚，宗教界で出世．

** Horatio Walpole（1698—1757）．fellow 1702. Baron of Wolterton. Horace Walpole の叔父で god father でもある．父 Sir Robert Welpole の実弟．

*** Charles（2nd Viscount）Townshead，1674—1738. Tory 党の一門でありながら Whig 党を支持．Sir Robert Walpole の妹 Dorothy と結婚．Walpole 内閣にあって協力．しかし1730年 Robert Walpole と対立して，政界を去る．農業技術改良に専心．カブの栽培普及に尽力，「カブのタウンゼンド」の異名あり．